

内科医 つれづれ草

高山浩一

⑥

がん診療の世界で「ゲノム医療」が注目を集めています。ゲノムとは平たく言えば遺伝情報のことで、二重らせん構造を持つDNAに保存されています。DNAは糸巻きにくるくると巻かれたような状態で、細胞の染色体に収まっています。肌の色や顔かたちなど持って生まれた性質は、あらかじめ遺伝情報によって決められています。遺伝情報がどうしてがん診

ゲノム医療

療に結び付くかという点、がんとは遺伝情報につけられた傷がもたらす病気だからです。肺がんの領域では既に、がんに関連する遺伝情報を担う「がん遺伝子」の検査と治療が不可分になっていて、分子標的治療薬を使う場合、がん細胞の遺伝子検査が必須です。特定の遺伝子に傷があると分子標的薬は強い効果を発揮するのです。調べるべき遺伝子が一つか二つであれば問題はないのですが、医学の進歩につれて、がんに関わる新たな遺伝子の異常が次々と見つかっています。例えば肺がんでは、まず四つの遺伝

将来知ること熟考を

子を調べる必要があります。一つずつ調べると時間がかかるため、がんに関する数百の遺伝子を一遍に調べる「がん遺伝



イラスト・山本重也

子パネル検査」が普及しつつあります。ただ、技術の進歩に伴う負の側面に注意を払うべきでしょう。実際、肺がんの遺伝子検査で偶然にも乳がんの遺伝子が見つかることは大いにあり得ます。がん遺伝子が見つかったからといって、必ず発がんするわけではないのですが、今後の人生を発がんの不安を抱えて生活することになりかねません。そうすると、米国の女優のように発がんを恐れて予防的な乳房切除を行う人も出てくるかもしれません。今はその働きがよく分からない遺伝子が実は危険な病気に関連していることが、将来分かるかもしれません。人は、自分の身に起こる深刻

な病気をどれだけ正確に知りたいたいのなのでしょうか。それを知ってしまったとき、その心理的負担に耐えられるのでしょうか。一方で、本当にかんになった時、知らない方が幸せだったと言いつけるものなのか。やはり遺伝子検査が持つ意味合いをよく理解している相談者が必要でしょう。ゲノム医療はそのような負の側面への対策として「遺伝力ウンセラー」という人材を育てながら、前に進もうとしています。ゲノム医療を受ける前に、自分の将来をどれだけ知りたいのか、よく考えてみる必要があります。(京都府立医科大学教授)